ミニシンポジウム記録 水産分野におけるキャリア教育：次世代育成の緊急性と今後の課題

1. 北里大学における岩手県と神奈川県での
水産教育の展開

高橋明義

北里大学海洋生命科学部

1. Education on fisheries sciences at
Kitasato University in Iwate and Kanagawa
AKIYOSHI TAKAHASHI*School of Marine Biosciences, Kitasato University, Sagami-
hara, Kanagawa 252-0373, Japan*

1. 三陸のめぐみ

北里大学水産学部（現海洋生命科学部）は1972年に岩手県三陸町（現大船渡市）に設立された。学生は1年次に相模原キャンパスで教養教育を受けた後、2年次からは三陸キャンパスへ移り住み、専門教育を受けた。ほとんどの学生は三陸町の住民が経営するアパートや下宿に仮住まいをしていた。

田舎だけあって、学生の生活に自ずと自主性が備わっていた。「水産」には、「漁村」の生活で日常的に接していた。早朝は定置網の漁船に同乗、浜では牡蠣の殻むき。春はワカメ狩り、冬には川に遡上したサケの漁獲。水産の現場を居ながらに体験できた。

2. 三陸から相模原へ

2008年、時代の流れに応じて学部名称を「海洋生命科学部」に変更した。就職率も堅調であった。その優れた教育の場は、2011年3月11日の東日本大震災、突如発生した巨大地震と大津波により、突然失われた。その後、海洋生命科学部は相模原キャンパスに拠点を移した。2008年のリーマンショックあたりから下降気味となった就職率は、最悪の時には全国就職率より10ポイント以上も下回った。震災を経験した学生の動揺が長引いたことや、海と森に囲まれている三陸からの移動を余儀なくされ、新たな環境に馴染みにくかったことも一因

であろう。

3. 学生気質の変化

相模原キャンパスへ移動したことにより、学生気質は変化してきていると感じる。2012年には、留年生は別として最後の水産学部生が卒業し、学生はみな海洋生命科学部生となった。講義科目から「水産」の二文字は消滅した。学生の田舎・自然志向は弱まった。受験者数は増え偏差値は上がったが、凄味は薄れた。しかし、就職先の主流は水産関係だ。

推薦入試の面接では受験生のほとんどが志望動機に水族館勤務を挙げる。入学時の将来の希望は水族館・博物館が3割を超えるが、卒業時に初志を貫徹できるのは3分程度である。逆に、入学時の希望が3分程度だが、実際の就職で3割を超える業種は「水産物・卸・加工」と「食品」であり、あわせて6割を超える。多くの学生は在学中に自分の特性を見つけ出そうとしている。いわば自分探しの旅に居るようなものだ。そのせいか、就職活動に出遅れ気味の学生が見受けられる。

4. 現在の就職支援策

就活は面接で決まる。採用者が望むことは、協調性とコミュニケーション能力、そしてポジティブに考えてポジティブに行動できる能力だ。これらを付与するために全学年を対象とする講座を開いている。また、キャリア形成支援室を設置し、就職情報を集約している。そこではキャリアカウンセラーや就職委員の教員などが交代で学生の相談に乗っている。学生の視野を広げるために、水産関係を中心とする企業・団体・官公庁から講師を招き、業界研究会を開いている。さらにこれまで以上に重要性が高まったインターンシップへの参加を促すために、これを単位化した。それでもなお、将来の方針を定めることができない4年生には個別に相談や指導を行っている。各種対策が功を奏し、2014年度の就職率はV字回復し、全国平均に肉薄した。とはいえ、就活期間の後半倒しにより、また新たな課題が生じている。